

しやりこうべ

室生犀星

青空文庫

電燈の下にいつでも座っているものは誰だろう、——いつだつて、どういう時だつて、まじまじと瞬きまたたもしないでその光を眺めているか、もしくはその光を肩から腰へかけて受けているかで、そうして何時いつも眼に触れてくるものは、一たい何処どこの人間だろう、——かれはどういう時でも何か用事ありげな容子ようすで動いているが、しかしその用事がなくなると凝然じっと座つてそして物を縫うとか、あるいは口をうごかしているとか、または指を折つて月日の暦を繰っているかしている、——かれのまわりには白い障子と沈丁花のような電燈とが下っているだけだ。

誰でもこんな姿を見たことがないか——あるいは五年も十年も

さきから、いつだって晩にさえなれば形紙の中から抜け出した蝙蝠こもり色をした姿を、おのれの住家の中に——飽き飽きしながらもその影を除くことのできないようにして座っているではないか——よく考えて見てもそんな人間に知り合いはないが、よくよく見ると見覚えのある毎日見る顔で、毎日見ているために何時の間に
か忘れ果ててしまっているような顔かおつき付で、そうして急にはちよつとは思ひ出せない顔付——そういう馴れきつた顔つきであるために、心には何も残していないようで、とうていその顔付から遁にげ出すことのできない宿命じみた蒼白い顔付——それが春夜にもなお電燈の下に座っている——。

晩になると一軒の家にきつとこんな姿が決して座っている。ど

んなところにも黙りこくつて、考え込んで、考え込むために黝くろずんだ姿で、季節はずれの菌きのこのように湿っている——それは客間でも座敷でも茶の間でも、あかるい電燈の下にはいつでもきちんと座つて、十年が二十年でも、そうしてこの世の終りまでも見とどける心がけで、この世の終りはきつと自分だけが居残るだろうという自信をもつて、実際は見とどけ過ほほえるような長生きの前例で、さもしくしかしこつそりと一人で微笑ほほえんで座っている、——このおしの強いどうにもならない宿命じみた陰影をどうしたって追ひ払うことはできない、——明るければ明るいほどこの姿は濃い——消えてゆくような影や形ではない。

こんな人生のくらしを眼をほそめて眺めて見わたすと、家とい

うあんな陰気な箱みたいな二重にも三重にもあるいは十重二十重になった中から、ただ映ってくるものは一つの電燈の下っている真下に、いつまでも消えそうもない宿命の姿だけが家々の内部からえぐり出したように見えてくる——劇場のさじきに一人ずつおさまり返っている看客かんかくのように、人生のひもじい堪らない晩には、あんなにくどくどした宿命がにじんで、たいくつなこの世の終りを、自分のまわりに生命をもったものの終りをちゃんと見とどけるために座っているではないか——。あれらは退屈を退屈としていない宿命のかけである。強情と我慢とからきた人生の骨拾いで、相手のしやりこうべを火葬場の寒い吹きさらしの灰の中からほじくり出して、さて箸のさきにつまみあげてほとほと安心し

きつた顔つきで優しい微笑をもらすところのゴヤの婆さん——そして己れもやつと宿命の衣を脱いでしまつて、それきりがっかりして、

「わたしはこれから何をしたらいいのだろう——もうあんなにきちんと座つていなくともよい、あんなに碌ろくでもない片いじな昼も夜もない見張りをすることもいらない。」

かれは心でそう言つても、やはりぬけきらない宿命のつづきを己れの子供や、子供の又の子供などにむかつて、くどくどと又あたらしく籠を編むように考え出すのだ、——そしてそのひまひまには、あのようにしやりこうべになつて、灰の粉になつて、もうあんなまんまるい形さえなくなつた骸骨にまでも、遠いむかしの

考えを比較つきあててはそれを子供にためそうとする——あときはあ
あいうふうだったし、このときはあの人こんな顔つきでこんな
調子で物を言ったから、この子供にはこれこれのことが適当だろ
うとまだこわれもしない人生の算そろばん梯はしをはじくのである。そして
その、子供につきあてた考えが当たたらこの宿命のかげは心しず
かに、この世の清い言葉で言うなら、全くほんとうにこころ静か
に何十年ないほほえみを漏らすのだ。——あんなに永い間電燈の
下で辛抱していたことも、ここまでくれば結局どんなに辛抱甲斐
のあったことかもしれない——とそうかれはかれらしく考えるの
である。だが、とうてい彼は彼らしい以外には何も考えることは
できなくて、しまいにはかれはその以前の、かれのための宿命で

ある——いまはそのしやりこうべが何か言おうとするのを聞きす
てるわけにゆかないのである。

しやりこうべは言うた。

「もう止せ。」

「いえ、わたしはわたしの言うだけのことを、わたしの生きてい
る間はみんなに言わなければならぬのです。」

「あとの者どもはあれらに勝手にさせたらいいだろう。おれ一人
に取り憑いた宿命でおまえはもう沢山だろうからいいかげんに止
せ。」

「あなたはしやりこうべですもの——そんなことは言つたつて言
わなくたって、この世には何^なんにもならないことだとそう思いま

せんか。」

「ふむ、なるほどおれはしやりこうべだ。——だが、おまえもそれになってしまつて、箸のさきでその頭の鉢を曾^かつておれのを拾いあげたように、その子供らにつまみ上げられるだろう——だからいいかげんにしろ。」

「いえ、わたしはまだまだですもの。ほんとにまだまだだ——。」
かれはかれらしく早速みぶるいを一つやつて、さて霜どきの蝗^{バッタ}のように瘠せたからだを身構えることによつて、己れの健康がどれほどもうもなっていないのを喜ばしげに顔の上にあらわした。

「迎えにゆくぞ、——」

「来られるのですか？　不吉な、そして用もないしやりこうべ

さん。」

かれはそこで又一つ、追いかぶさったように身ぶるいをした。

「その頭の鉢の地がだいぶ剥^はげかかっているぜ、——風邪をひとつ冒^ひいたつてもうそれきりだと思うがよい、おれの見舞いにゆく前に、誰かが行っておまえのかたをつけてしまうだろう。」

「おどかしたつてそりやだめです。——このとおりわたしはありますがたいことには、全くこのとおりにいきいきしているんでございますからね。」

「いや、ありがたいことにはそんなひまにも少しずつずり込んでくるような気がするからね、まああわてずにおれみたいになるんだね。」

しやりこうべは程よく微笑^{わら}つて、そしてその声を消してしまつた。——かれは間もなく嘔^{はきけ}氣に似たうすきみわるさを汚ない匂いをかいだように、その鼻膜のあたりにかぎつけた。そして何度も蒼白い唾^{えんがわ}を椽側へ出て、地面の上に吐きつけた。そして執念深そうにかれはつぶやいた。

「しやりこうべになるなんて厭なことだ。わたしはまだまだ——」

そして彼女^{かれ}はやはり電燈の下で、そのくろずんだ姿をいつまでも凝然と座らせていた。——その姿はかつてしやりこうべでなかったかれの男の、嘆息のもとであつたが、いまはその子供らがわかるがわるその姿を見ては、溜息をついていた。そして子供ら同

士がささやき合せた。

「いつまでああしておれだちのことを、くどくどと小言を言い出すのだろう——もう止してくれればいいのに。」

第二の子供は言った。

「いいかげんに往生とやらをしてくれればいい。」

＊

或るところに二つのしやりこうべがころがつて、向き合つて永い間どちらからも喋らなかつた。が或るとき一つのしやりこうべが言った。

「見覚えのある顔だ、——」と、そう考えてじろじろ眺めた。も一つのしやりこうべも殆ど同時に「どこかで見かけたことのあるような。」顔だと思つた。しかしどちらも黙つていた。それから何十年経つたか、或いは何百年経つたかも知れない、——風雨にさらされながらも二つの白いしやりこうべは、向き合つたままでいた。

一つのしやりこうべの穴のところに、毎年のように紫色をした威勢のいい凜とした^{すみれ}堇の花が咲いた。——別のしやりこうべはその花の色の美しいのに見とれながらいたが、あるとき珍らしく声をかけた。

「その花をくださいな。」

その時しやりこうべは吃驚^{びつく}りして、あいつはいつも電燈の下に座っていた奴だなど思った。——あいつはこんなところへまで出て来ておれに又たせがむんだなど思った。

「こんな花をお前は何にするつもりか——。」

が、も一つのしやりこうべは何も知らないように言った。

「その花はたいそう美しくて可哀^{かわ}いいんですもの。」

「ふう！ お前にはまだ花なんかのことを気にしているのかい。」

かれがそう言ったとき始めて、別のしやりこうべは気がついて、嬉し^{しま}そうにこんどは遠慮もなく莖をへし折つて了った。

「それを折ってはいけない——。」

そういう声はきこえなかったらしい——。

「あなたのならかまわない。」

しやりこうべはこういうと、あるたけの堇をむしり取ってしまった。別のしやりこうべはがっかりしたはずみに、大方、この間からのひでりつづきの故だったのだろう——その白いしやりこうべをあとかたもなく、ぼろぼろに崩れ落してしまった。——も一つのしやりこうべはそんなことを少しも知らないで、紫の色をした堇を抱いて、その匂いを専念にかいでいたのである。——そして気がついて見ると、も一つのしやりこうべの跡^{あとかた}方もなく崩れてしまったのを見て嘆いた。が、その次^{つぎ}にはまだ自分がこのようにがっしりした形をもっていることを何より喜んだ。

「わたしはまだまだだ、——。」

だが、崩れたしやりこうべのそばには、いつの間にか莖の花が咲かなくなつて、そこは粉っぽい粗い地面になつてしまつた。――それにもかかわらず別のしやりこうべは枯れた花を抱いたまま、こんどはすこしずつ崩れはじめた。――そしてしまいには跡方もなくなつて、いつの間にか其処に一本の電柱が建つたきり、あの世とこの世とを正確にしきりをしてしまつた。

青空文庫情報

底本：「文豪怪談傑作選 室生犀星集 童子」ちくま文庫、筑摩書房

2008（平成20）年9月10日第1刷発行

底本の親本：「日本の名随筆 別巻64 怪談」作品社

1996（平成8）年6月25日第1刷発行

初出：「中央公論」

1923（大正12）年6月号

入力：門田裕志

校正：岡村和彦

2013年9月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

しやりこうべ

室生犀星

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>